假名日本紀卷第二

神代下

天照大神の子正哉吾勝々速日天忍穂耳尊高皇産霊尊の女拷幡千千姫をめとりて。天津彦彦火瓊瓊杵尊をうむ。故。みれや高皇産霊尊。いとをかの愛憐とおぼしめしろしめして。以て崇養ふ。つひに皇孫天津彦々火瓊々杵尊を立てもて葦原中國之主となさむとおぼす。もろもろの地多に螢火光神おほします。また草木ものいふ。蠅聲邪神おほします。また草木ものいふ。よく言語ふあり。故。高皇産霊尊。八十諸神たちをつどへて。ととのへての玉もて。吾葦原の中つ国乃。邪き鬼をもて。

明治大学図書資料付

平むとおもふ。まさに誰をつうハさばよ。私ごとくハ
爾諸神たち知むと。勿隠しそ。答曰さく。天穂日命こと
神乃傑なる神也。試にたゞハばるべきものやうに俯して
衆言よりさうして。もろ〳〵天穂日命をもてゆうて平し
む。もうしどもの神大己貴神にたゝらうびて。なほ報
聞さば。故もろ〳〵にそれ子大背飯三熊之大人をたうる。
もろ〳〵乃名ハ。武三熊之大人。これもまた還りて。その父に順
てつひよかへりをもをさば。故高皇産霊尊。ふたゝに諸神
もろをつどへて。まさにたうるべきものをこひたまふ。
答をさく。天国玉之子天稚彦。これたけき人あり。試に

もろ〳〵に高皇産霊尊。天稚彦ハ天の鹿児弓おうび。天の羽々
矢を賜りて。もて遣りぬ。この神をもて忠誠をつく
すべしてもふもの。顯国玉之女子下照姫をもうけ。また乃名ハ高姫もの
名ハ、稚国玉
なりてゝ。ゆうて曰く。吾まさに葦原中國を馭うべ
きものなりて。つひよ復命ふことなしよ高皇産霊尊。その
久しくかへりごとを報にまゐこずれと。怪みもるもの無名
雉を遣して伺せしむ。それ雉。天稚彦の門のもとに降
止る。湯津杜の木のもとにたてり。天探女ものもの。天稚彦に
もをしていはく。奇しき鳥ありて杜のもとに居る。天稚彦もの
もの高皇産霊尊のたまひし。天鹿児弓。天羽々矢をとりて。

雉を射てころしつ。その矢雉の胸からうつて。高皇産霊尊
のまへに。前にいつるとれば。高皇産霊尊。その矢をとり
かへりてのたまはく。これ矢は昔の日ごの天稚彦にたまへし矢
なり。血その矢に染たまへり。けだし国神とあひ戦ひたまふ
やうに。矢を取たまひて。投げ下したまふ。その矢落ちぐ。もし
もし天稚彦の胸上にたまぬ。これに天稚彦新嘗したまふ
もし天稚彦の胸上にたまぬ。これに天稚彦新嘗してねふ
せれどもなほ。矢にあたりてたちどころに死にぬ。これ世
人のいはく反矢可畏といふ。もしまた天稚彦の
妻下照姫なりけるしむ。聲天にきこえ。この時に天國玉
その哭声をきく。ときに高彦根神。
はるばるを知りたまふ。もしもし疾風を発して。尸を挙げ大にい
たさしむ。ときに喪屋を造りて殯をなす。もしもし川雁をも
て。持傾頭にしたがひ持帰者となし。一ふ云く。雞をもてきざみ
もちゐ。また雀をもて春女となし。川雁をもて帰
一ふ云く。もしもし川雁をもて。持傾頭となす。また持帰
者となす。鳩をもて尸者となす。雀を以て春女となす。鷦
鷯をもて哭女となす。鶏をもて造綿となす。烏をもて宍
人となす。すべてもろもろの鳥をもてことごとくに。
もろもろて八日八夜。かきなでしみたまふ。しかるに天
稚彦。もしもしの中國にありしとき。味耜高彦根神そう

るまし。故味耜高彦根神。天にのぼりて喪をとぶらふ。とき
にこの神容貌まさに天稚彦がいきましゝときの儀ににた
り。故天稚彦乃親屬妻子みなこれをみて吾君ハなほまし
けりといひて。すなはち衣帯によぢかゝりて。うれ喜び。うれ
慟ふ。これに味耜高彦根神。忿りおこりでましていハく。朋
友の道。理うべあひとぶらふ。故汚穢れをもはゞからずして。
遠よりまゐきたりしをこそ。何それぞ我を亡者に誤つや
といひて。すなはちその帯せる劔大葉刈をぬきて。以て喪屋
を斫ふせつ。これすなはち落て山となる。今美濃国藍見川
の上にあれる喪山これなりと。世人生る人をもて死る者に

あやまりことをといふ。これその縁なり。この後に。高皇産霊
尊さらに諸神たちを會へて。まさに葦原の中つ国に遣さ
るべき者をえらびたまふ。僉曰さく磐裂根裂之神の子磐筒
男磐筒女の生ませる子經津主神。これまさによけむ。時に
天石窟にすむ神。稜威雄走神の子甕速日神の子熯速日神。
熯速日神の子武甕槌神あり。これ神進てまをさく。豈ただ
經津主神ひとりを丈夫にして。吾ハますらをにあらむや。其
辭いきざしたかし。故以てすなはち。經津主神にそへて葦
原の中つ國を平しむ。二はしらの神。つひに出雲國。五十
田狹之小汀にあまくだりまして。すなはち十握劔をぬき

て倒に地につたたて。その鋒端にうち踞て。大已貴神に
こひて曰たく。高皇産霊尊。皇孫をくだしまたまくこの地
の君臨たまへ。とたまひす。故まけられたまひし神をつ
かはして。ちはひ平定しむ。汝の意何如。ものまうさまくやい
なやといふ。これに大已貴神對てまをさくまはく我子に
こひて。然してのちにかへりまをさむ。これらはかそ
の子事代主神。ありて出雲国三穂之碕にいでます。鉤魚を
ほりして樂とおもふ。或かいはく。遊鳥をとりをいます。故
熊野諸手船はまをさの名船を。使者稲背脛をのせくだして。
高皇産霊のみことのまを。事代主神にいはかへ

まをさまを辞を問ふ。これに事代主神。使者にかたまを
ていはく。なんぢ天神のこと問ひたまふみことのまあり。我父
よろしくまさに避まをるべし。吾をまさに違ひまつらじ。因
て海中に八重蒼柴籬をつくりて。船の枻をふみてさりぬ。
使者もとに還まをして。かくまをしごとをまをす。故大已貴神をふ
ちそれ子のまをを辞ともして。二柱の神にまをしてま
をさく。我ぞ怙める子だにまをでにまをしまをぬ。故吾も
まさまをまをるべし。吾防禦まをうで国のうちの諸
神たち。かならずまをちに同小禦さて奉。これ今奉まつら
ば。誰ぞまさあらじといひて。をふ

ろち国平しとそれにつきたし。廣矛をもて。二ろ百の神に
さだけまたまふ。曰く。吾これ矛をもて。ひとり功治せれ
こをあも。天孫もしこの矛をもて。国を治めば。かるが
をはさに平安くまさむ。今我まさに百不足八十隅にかく
隱ふ。と言をもて。つひに隱れぬ。ここに二ろら
の神。あもこの順ならぬ悪神たちをつみなひて。つひに以て
復命す。

一ふ云く。二ろらの神。つひに邪神および。草木石のた
ぐひを誅て。こをぐに平とろぬ。それ不服ぬものは
たゞ星神香々背男のみ。かもまろ倭文神建葉槌命をつ

うろつれいをふはち服ひぬ故ニろらの神。天かの
ろれ。

こゝに高皇産霊尊。真床追ふ衾をもて。皇孫天津彦々火瓊
瓊杵尊におほひて。あめ降ぼしむ。皇孫をふろち。天の
磐坐をはなれふち。ちろ天八重雲をおしわけて。稜威之
道別に道ふみて。日向の襲之高千穂峯にくだりぼし
たまてにして。皇孫いでまさむ狀は。ちろふろ槌日二上天浮
橋ふろ。浮渚たひらに立して。脊宍の空国頓丘ふろ国覓ぎ
ふろ。吾田の長屋の笠狭の碕につきぼしぬ。その國に一
人あり。こづかつ事勝國勝長狭とふ。皇孫とひて曰く。

国なりやいかや。對て曰はく。もろ〳〵に國あり。請ふ。こゝろのまゝに遊びのぶへ。故皇孫。就てこれをめしたまふに。国美人あり。名をハ鹿葦津姫と云。（其の名ハ神吉田津姫又の名ハ木之花開耶姫）皇孫。こゝに美人をこひてのたまふハく。汝ハたゞ女ぞや。こたへてまをさく。妾ハこゝを天神乃大山祇神をめしてまをさく。しるる児あり。皇孫よりて幸まれ。をのゝ一夜あり。て娠ぬ。皇孫いつゝをなゝ月とむかへて曰てく。もゝ天神といふとを何ぞやく。一夜乃間に人をして娠まをすや。汝がゝ子ぞ。我が子にあらじ。故鹿葦津姫いゝゝ子ぞ。我が子にあらじ。故鹿葦津姫いゝゝ見まをさく。もゝ無戸室をつくりて。その中に入て

こもりて誓ていてく。妾ゝゝめ。もし天孫乃胤あらずハ。うるゝぞまさに焦滅び。もし天孫の胤なゝ。火を害ふこと能ゝ。ゝゝ火を放て室をやく。ゝゝて烟乃なかよりて生出る児を。火闌降命とゝづく。是隼人等が始祖なり。次に火熱をゝけてゝ月をゝて生いつれ児を。彦火火出見尊とゝまをす。つぎにゝゝつぎれ児を火明命と名つく。これ尾張連らゝゝをもやゝ。ゝゝて三子ゝ子。父ゝくゝくして。天津彦々火瓊々杵尊崩ゝて筑紫日向可愛山陵に葬ゝ。

一書かゝく。天照大神。天稚彦にこゝのゝして曰く。

豊葦原中国ハこれ吾児乃主たるへき地なり。しかれと
慮に残賊強暴横悪之神ともあり。故汝まつ往て平よと
のたまひて。すなハち天鹿児弓ならひ。天真鹿児矢をたまひ
てつかはされ。天稚彦みことそのおほせうけてくたりまされ。
さら多に。国神乃女子と娶て。八年になれとてかへり
ごとまうさゞりし。故天照大神すなハち思兼神を召して。そ
れまねこざれ状を問たまふ。これに思兼神おもひて曰
してまうさく。よろしく亦雉をつかハして問たまふへし。
こゝにかの神の謀にしたがひて。すなハち雉を使ハし
てみせしむ。その雉とび下りて。天稚彦が門乃前の湯津
杜樹のすゑに居て。なきて曰く。天稚彦何のゆゑか。八年
乃間いまだ復命まをさゞる。時に国津神あり。天探女と
なづく。それ雉を見ていはく。鳴声あしき鳥。この木の上
にをり。射ころしつべし。天稚彦すなはち天神乃たまひし
天鹿児弓。天真鹿児矢をとりて。すなはち射ころしつ。そ
の矢雉乃胸よりとほりて。つひに天神の所処にいたれり。こ
れに天神それ矢を見たまひてのたまはく。これ昔我
天稚彦にたまひし矢なり。今何乃ゆゑに来つるぞとのた
まひて。すなはち矢を取て呪てのたまはく。もし悪心を
もて射ば。すなはち天稚彦かならずまがこれあらむ。若し

きよき心をもて射バ。さらに恙あらじ。よりて還投た
まふ。そなちらその矢落下りて天稚彦の高胸にたちぬ
因てもて立ところに死ぬ。これ世人の所謂かへし矢
畏るべきことのもとなり。これに天稚彦が妻子
ども天より降りて柩をもて天にのぼりて。喪屋とつく
りて殯し哭く。これよりさき天稚彦味耜高彦根神とう
るはし。故味耜高彦根神天にのぼりて喪をとぶらふ。い
たくミなきも。これこの神かたちおのづから。天稚彦
によくかよひ似たりしかば天稚彦が妻子たち見て喜びて
いはく。吾君ハなほましけり。とて則衣帯によぢかゝ

りてたしてはなれべからず。これに味耜高彦根神いかり
て曰く。朋友うせたり。故吾はるばる来りとぶらふ。如何で
まかれる人と我にあやまりやとひて。すなはち十握
剣を抜て喪屋を斫り倒す。その屋墜て山となる。これを
なるら美濃國の喪山これなり。世人死る人をもて己
をたがへまがふることを悪む。これその事のもとなり。され
に味耜高彦根神光儀うるはしくして。二つの丘二つの谷の
間にてりかゞやく。故喪につどへる者哥よみして曰く。
或云く。味耜高彦根神の妹下照媛。つどへる人として曰く。丘
谷にうつやくハ。これ味耜高彦根神なりとしらしめせ

これをもて。故うさよ美してていとく。
けうえるかはや。おやたかとかうなりぬれ。たれかれ
まれの。あれたりとやとたにつくりたりす。あらをたた
うひこ神。又哥よとしていとく。
ありけうれひふ清りかいとうをせや。いしかとう
たぶら。かとふらに。けうとをとりさしめろとに。よと
とらひ。ふしかとかとふらに。これつく歌は。いり夷曲と名
ぢくをでにして天照大神。思兼神のいりを。萬幡豊秋津
姫命をもく。正哉吾勝々速日天忍穂耳尊にあとせて。
妃とふして。あとをとの中に国にありくたりまさしむ。

これをもて勝速日天穂耳尊天浮橋ふたりして。ほをり
て曰はく。彼地はさ瓦けり。不須頗傾凹目杵之国うもと
曰はて。をふとをちさに還り登りす具にけりくたりは
さぶれ状をもて。故天照大神。もと武甕槌神おうび。経
津主神をもさして。先はけてとはしむ。れと二とと
瓦乃神。出雲国に降到り。大己貴神かられてのとりてく。
汝これ国をもて天神ふ奉らをやいるや。對て曰さく。吾
子事代主神。鳥遊遊して三津の碕にあり。今まさに問て
もて可へりごをまをさむ。をふとら使人と遣してら。
對てまをさく。天神。乃こひの所何ぞたくまをりぞ

むや故大己貴神。とれ子の辭ともて。二神に吹とをゝ
まゝを。二ゝられ神。をふいち天に昇ゝて吹とをゝ
ともて告ゝてまをさく。葦原中國を立もぐに平竟ぬと
ゝに天照大神。勅ゝてのゝこゝにてく。をし然らハまゝか吾
子を天くだゝまゝ。且あゝ降ゝまゝをもとれ間に。
皇孫もでゝ生れたまゝ。號て天津彦々火瓊々杵尊とゝ
ともを。らゝに奏をこゝあゝく曰てく。これ皇孫をもて代
て降ゝまゝをとれまゝ。故天照大神。もれゝら天津彦々
火瓊々杵尊に。八坂瓊曲玉あゝび。八咫鏡草薙劔三種寶
物をたまゝ。まゝ中臣乃上祖。天児根命。忌部の遠つおや。

太玉命。猿女のとほつ祖。天鈿女命。鏡造れとゝりけれや。石
凝姥命。玉作乃上祖。玉屋命。もべて五部の神ゝをもて。
配て侍らゝをゝ。ゝゝく皇孫にみこゝのゝての玉てく。
葦原千五百秋之瑞穂国ハ。こをわゞ子孫乃王ゝれへき
地なり。ゝゝく爾皇孫就てゝゝしをへしされく宝祚
乃隆まゝ窮こゝ。天壤ときゝゝまゝあゝるべしと曰ひ。
ゝてにして且降ゝまゝをこゝる間に。先驅の神。還ゝて
白さく。一神あり天八達之衢に。をゝ。その鼻の長さ七咫。
背乃なゝさ七尺餘まゝに七尋をゝ。べゝまゝ口尻あ
かゝ輝ゝり。眼ハ八咫鏡れゝくおゝて。てをかゞ乃け

るこを赤酸醬に似たり。もろもろ従神をつうして。往てこもる。うれに八十萬神ありこれ目勝あり問ふことを得ず。故こゝに天鈿女に勅してのたまはく。汝ハこれ目人に勝れる者なり。よろしくゆきてこゝふべし。天鈿女もろもろの胸乳露にうちて。裳帯を臍の下に垂たれて。あざわらひて向ひ立つ。これ衢神ごとひていはく。天鈿女汝うしもからをハ。何のゆゑぞや。こゝへて曰く。天照大神の子孫幸まします道路にかく居ること。なるハ誰ぞや。あへて問ふ。ちゆさの神。對て曰く。天照大神のみこ。今まさに降行ましぬと聞まつる。かを

迎奉らく相まつ。吾名ハこれ猿田彦大神。ことに天鈿女まさにひての玉ハく。汝まさに我に先ぶちて行ゆや。將我汝に先たちてゆうゑや。對てつゝく。吾うれ立て啓行ゆうゑ。天鈿女まさに問てのたまハく。汝ハ何處にいまさゝゑぞや。皇孫何處にいまさゝゑぞや。こゝへて曰く。天神の子ハもろもろ。まさに筑紫日向高千穂槵觸之峯にいまさゝゑまさんべし。吾ハもろもろ。伊勢狹長田五十鈴川上にいたるべし。因てのたまはく。我をあらハしつれる汝なり。故汝もて我をたくさに致もてし。天鈿女かへりまをしてまをさく。皇孫こゝにまをさく。天の磐

座をおしふち。天八重雲を排ひけ。稜威の道別にちわ
たく。天降ましつひに先の期ましまして。皇孫もか
ちち。筑紫の日向の高千穂けしふかの峯につきたまふ
もその猿田彦神ハもなちち。伊勢の狭長田ハ五十鈴の
川上に到まします。ちかいちち天鈿女命。猿田彦神の名をも
のまにく。つひに以てうひ送る。まこと皇孫。天鈿女命に
勅ましく。汝ましまして顯しまる神の名を姓氏とるすべ
しまして猿女君の號をまふ。故猿女君等の男女よびて
君とまふ。これをのちをれをなり。
一書に曰く。天神。經津主神。武甕槌神をまして。葦原の

なかつの国を平定させまふ。これよ二ましまの神。曰さく。
天ふ悪き神あり。名を天津甕星とまふ。亦の名ハ。天香々
背男。請ふ。まづこの神を誅て。然してのちに下たまく。葦原
の中ツ国をまして。これをふ齋主神。齋之大人と号
す。これ神今東國撮取之地にまして。ましまして二ましま
乃神。出雲五十田狭之小汀にありまく。大己貴神に
まして曰く。汝将ましまの国をもて。天神にたてまつる
や。否や。對てまとさく。疑ふ汝二神。これ吾まそに來まして
るにこそ。故許をまくまをまふ。こ小經津主
神。まれまち還ましまして昇てかへりまこと告をまふ高皇産霊

尊もふかき二神とかくしつうはして。大己貴神に勅して。いとく。今汝う言らをきくに深くそのの理あり。故更に條々おしく勅しのふ。そし汝ぢ治を顯露ならしめよ。ろしくうれ吾孫に治をべし。汝はもかきもて。神事と治をべしまく汝は天日隅宮に住むへし。今造るまつる。むしを非ちち千尋の拷縄をもて結て百八十紐にせ。をの宮を造る制は。柱はもかきもち高く太く板はもなきち廣く厚くせむ。まく將田供佃。汝ぢ往來て海に遊ぶ具のまうに。高橋浮橋たひ。天鳥船をまつくむ。まく天安河ふを。まく打橋を造らを。まく百八十縫之白楯つくる。まく汝ぢ祭祀を主ぐる者は。天穗日命らしなり。こに大己貴神らへて曰さく。天神の勅ふこと。如此慇懃ろ。あへて命に從うをやつぢ治を顯露のこをは。皇孫まさに治べし。吾まさに退て隱れなることを治ん。をれちち岐神をこちの神に薦てまつこと。ちまちかに我にかちて。從奉はべし。吾まさにこをちう避なくいひて。即ち躬ら瑞之八坂瓊をたひて。長く隱をまつき。故經津主神。岐神をもて鄉導となして。周流行。平らぐ。逆命もれうをはをなちち。まく斬戮を。歸順人をむまさにまく褒美。このことに

歸順首渠ハ大物主神ムすび。事代主神ムすび。事代主神ムすびハ
十萬神を天高市にあつめて。帥てもゝく天にのぼりて。そ
れ誠れ至尊ムまとす。うれに高皇産霊尊。大物主神に勅
もらく。汝もし国神ともて妻こ娶バ。吾ムか汝に疏れ心
あるこをもてなり。故今吾女三穂津姫ともゝく汝にうあハ
もゝく妻とせむ。うるわしく八十萬神うちを領ねて。ひたぶ
るに皇孫ムたゝに。護ひまつりて。もれうち還ひ降らし
む。もれうち紀伊国忌部れらのおや。手置帆負神を以
てもゝく作笠者こなし。彦狭知神を作楯者こなし。天
目一箇神を作金者こなし。天日鷲神を作木綿者とす。

櫛明玉神を作玉者こなす。すなうち太玉命をして以て
弱肩に太手繦をうちかけて。御手代をしてもてらの神
を祭るハ始てられうち起もう。又天児屋命。神事を主ど
ハ乃宗源ムひ。故太占之ト事をもて仕へ奉らしむ。高皇
産霊尊。うりて勅してのもまく。吾ハもムうち。天津神
籬れうび。天津磐境を起し樹てすさに天孫ムたゝに齋
もゝ百敷。汝天児屋命。太玉命。うるわしく天津神籬を持て
あうもうムうち國にくだりまく。亦皇孫れたうに齋れ
まつ。もムうち二もうらムの神をつかうまつりて天忍穂耳
尊にそへて以降をこれもうに天照大神手に寶鏡を持

天忍穂耳尊にうけて。祝ての玉玉。吾子この宝鏡を視まさ賞うれ。まさに吾を視うるとくしうるに床と同くし。殿をひらかして。もて齋乃かぐ美こかをべし。まさ天児屋命。太玉命に勅まさく。私ごとくハ爾二ら神。まさ同じく殿内に侍て。ようく防ぎ護るこをとなせ。又勅しての。ようく。吾高天原にさあらん。齋庭の穂をもて。亦まさに吾兒にまうせまつれ。もかた高皇産霊尊の女號萬幡姫をもて。天忍穂耳尊にうあらして。妃とかして天くだしまつれら。故れ大虚ふ居て児をうむ。天津彦火瓊々杵尊とまをす。ようてこの

皇孫をもて親のこころをに代て天降しまつらむ。これを故天児屋命太玉命にうび諸部の神をもく悉くみな相ひ共にくまつ服御つもの悉前の如くして授く然して後天忍穂耳尊天にかへりたまふ。故天津彦火瓊々杵尊日向の槵日高千穂の峯にあまくだりまして去て膏肉の胸副國を頓丘ふ国覓ぎて浮渚たるにたりてまして国のあるべ事勝國勝長狹をもてまして対てまをさくに国あれなりこをかくを勅乃まにくを賞うれに皇孫よりて宮殿を立てうに遊ますのちに海濱にいでまして一の美人を見

そふそれ皇孫それて曰そく。汝ハこれ誰の子ぞや。對て
まをさく。妾ハこれ大山祇神のむすめ。名ハ神吾田鹿葦
津姫。亦の名ハ木花開耶姫。そのくまをさく。まこと妾が姉
磐長姫在皇孫曰そく。それ汝をもて妻とを為むと
ハいふ。こたへてまをさく。妾が父大山祇神在こと以
てらひそく。皇孫そのく大山祇神よりて曰く。吾汝
が女をこそなもて妻とせむとおもふ。こに大山
祇神。もふそ二人の女をもて。百机飲食をもて。た
てまつることれに。皇孫姉ハ醜しとおぼして。ものさべして。
かへしそふ。妹ハ国色しとおもして幸あるくまを

まそふそふ一夜にして身こめぬ。故磐長姫大にそふて詛て
いそく。たそれ天孫所けたそふべして。妾を御まこうバ。
生ら子児。いのち永かく坐こそを磐石の常に在かのごと
し。今もて然らずして。唯弟ひとりめせり。故そのうち
ら む児。うなくぞ木華乃あるひよ。移落なる。一小云く磐
長姫。そふ恨て唾泣ていそく。顯見蒼生ハ木華乃如よ去
そくにうれそひて衰ふ。これ世人の。いのち短折さ
縁あり。これ後に。神吾田鹿葦津姫。皇孫をこたくまつる
て曰さく。妾天孫乃子をそふ。私にもて生まれるべ
こそぞ。皇孫のそのたまそく。天神之子とつくそ。如何

一夜に人をして娠せ給や。柳ゝ子にうゝざれう木花開耶姫甚もて慙恨てもれゝら無戸室をにゝらて誓て いゝく。妾ゝ孕ゝ。こゝもし他神乃子ゝバゝるゝず幸ゝを。これ實に天孫乃子なゝハ。かなゝぞまさに全く生ゝへ。こゝひてもれゝらそれ室のうちにつをて。火とゝゝて室を屋くこゝよ焔ゝ出て起るゝよ共に児とうむ。火酸荇命となゝく。つぎに火乃盛なゝこゝに児とうむ。火明命ゝ名づく。次に児とうむ彦火火出見尊ゝまをす。まゝれ名ハ火折尊

一書にいゝくゝ。火燄明ゝゝれようゝれ児。火明命次に火むゝ盛ゝれゝゝ生ゝ児。火進命。まゝ火酢荇命とまをす。次ゝ火炎ゝれときようゝ児。火折彦火々出見尊。をべてこ乃三子火をそこなふこゝをゝゝ。及び母まゝ少しを損ふ所ゝ。こゝよ竹刀をもて。そ乃児乃臍のをゝ截る。そのをゝ竹刀つひよ竹林にゝる。故その地を名つをゝ竹屋こゝふ。ゝれに神吾田鹿葦津姫。ト定田をもてなゝびをて狭名田とゝふ。其田乃稲をもて。天甜酒を醸て嘗る。まゝ淳浪田の稲をもゝ。飯に為て嘗る

一書にいゝくゝ。高皇産靈尊。真床覆衾ともて。天津國彦光彦火瓊々杵尊にゝをせまゝ乃ゝて。まゝふゝゝ天磐戸ひゝ開

天八重雲をおしわけて。もてあ降しのぶ。られと大伴連遠祖天忍日命。來目部遠祖天槌津大來目をひきゐて。背ふ八天磐靫をおひ。臂ふ八稜威の高鞆をまき。手に八天梔弓天羽々矢をとり。おのれ八目鳴鏑をとりそへ。又頭槌乃つるぎをもちて。天孫乃前に立して行くぐり。日向の襲乃高千穂の槵日乃二上の峯天浮橋に。くだりつくく。浮渚たひらにたちして。膏腴の地をひらき。国覓ぎまうして。吾田長屋笠沙に到り。名を事勝國勝長狹といふ。故天孫をこゝに一神あり。名を事勝國勝長狹といふ。故天孫をこゝに一神にとひて曰はく。國あるや。對てまをさく。在

り。因てまをさく。勅のまにく奉らむ。故天孫をこに留りぬ。それ国勝事勝神ハこれ伊弉諾命乃子なり。また名ハ塩土老翁。

一書にいはく。天孫大山祇神の女子。吾田鹿葦津姫をもとめ。ともに一夜ふすみぬ。つひに四子をうむ。故吾田鹿葦津姫子をつれてまをさく。進てまをさく。天神の子を。乃私に養まつれべりむや。故状をまをして聞えむ。これらは天孫の子等をこそ。朝てのぞかく。妍哉。皇子たちハ聞喜を生ませうな。故吾田鹿葦津姫。ふたりいう祭ていはく。何為で

妾と嘲ひ給ふ。天孫の給ふ所ハ、心疑ハし。故、嘲るいうにこなもば。又天神の子といへ。ごと。豈〻一夜の間に人をして身ごもせ給ふや。固に我が子にたらじ。是を以て吾田鹿葦津姫。甚く恨て無戸室をつくりて。その中にこもり。誓て曰く。妾が娘ら若し天神の亂にあらずハ。かならず焼失ん。是若し天神のみ子ならバ害ふこなし。ふ。もし火と放て室を焼く。その火の盛なるとき。明るくたに。踉たきびていでる児。自ら言る。吾ハ是天神の子。名ハ火明命。ちゝ父いでこにゝ坐ます。次に火盛りまゝこたゝ小躍詰て出る児。また言る。しかこもと天神の児。名ハ火進命。ちゝ父おなじ兄いでこゝにまします。次に火炎きたりたる。みたきびて出る児。又名のるハ。吾ハ火折尊。ちゝ父おなじ兄。何處にまします。次に火熱をうれときに。ハ義詰びて出る児。また名のる。吾ハ是天神の子名ハ彦火々出見尊。ちゝ父及び兄いつくにまします。去かして後母吾田鹿葦津姫。火燼の中より出ゆきて。言あげしていとく。妾がうめる児。ちゝ妾が身。わのつゝ火ハ難にあくごとし。少もこなこ所かし。天孫豈見そなはすつや。こゝへて曰く。我本ちゝこれ吾児なりと知ぬ。たゞ一夜に

して身ハ疑ふもれたもひ。衆人をしてこれ知しめたまふ。是吾が児。あべまます天神。ふ一夜にして娘しめ。まます汝霊異き威ありあり。子等ます倫に超まる氣あれこれを明さむ。これ故に前日れ嘲ける辭なり。

一書に曰く。天忍穂根尊。高皇産霊尊れ女子栲幡千々姫萬幡姫命をめらして。又いてく。高皇産霊尊のこむをめ。火之戸幡姫児千々姫命。をうて児天火明命をうむ。次に天津彦根火瓊々杵根尊をうまつる。その天火明命れこれ。天香山命ハ。これ尾張のむらじらが遠つ祖なり。

皇孫。火瓊々杵尊と葦原中國ふあり降り奉るにいさぶにれらべて。高皇産霊尊八十諸神に勅してのたまはく。葦原中國ハ。磐根木株草葉をなほらく言語夜ハ熛火のごとくして喧響晝ハ五月蠅なと沸騰る云々。これに高皇産霊尊。みこのうして曰ていく。昔天稚彦をあり原れ中つ国に遣て。今に久しくまるなおざれ故ハ。けだし是国神いむうもれうもてう。をかうち名なし雉子をつうて。往てこせよ。これ雉らび降り来でうして粟田豆田を見てもふうち留りかるぞ。こを世のいをかる雉の頻使のこのもとある。故まます無名雌雉をまされ。

この雉とび下來りて。天稚彦の為に射られ。その矢に中
上りて報まうして云々。これらに高皇産霊尊をおもう
真床覆の衾ともて。皇孫天津彦根火瓊々根尊にこせて
降りて。天八重雲をおしわけもて天ちづまりらむ。
故この神を。稱まうして。天國饒石彦火瓊々杵尊とまう
す。これに降到ばしゝ處をば。日向の襲の高千穂添の山
峯という。それ遊行されにしたにとびて云々。吾田笠狭の
御碕にいたりすつひに長屋の竹島にのりまして。そ
なたちその地を。巡覽まうばそこに人あり。名を事勝国
勝長狭という。天孫まうして問てのたまはく。これ誰が國

ぞ對てまうさく。是ハ長狭の住る國なり。おうれども今
をかりまうす。天孫にたてまつれる。天孫まうす問てのたまはく。
それ秀起る浪穂の上に八尋殿をたて手玉玲瓏に織
紝少女ハこれ誰がむすめぞやこたへて曰さく。大山祇
神の女たち。大と磐長姫という。少を木花開耶姫という。
また名ハ吾田津姫云々。皇孫ようやく豊吾田津姫を幸
す。それより一夜にしてはらめり。皇孫うたがひ
云々つひに火酢芹命をうむ。つぎに火折尊をうみまつ
る。また號ハ彦火々出見尊。母ハ誓をでにいちぢれ
まさに知ぬ。まうすにこたへ皇孫のみこのたまはく。豊

吾田津姫。皇孫をうみてあひまぐはんぞ。皇孫憂ひて。
もれをうち哥をよみて曰く。
わきたに出ハ。石にハ入れども。さ礼どもおもあたらぬ
もよをぬつちぐりよ。
一書ハいとく。高皇産霊尊ハ。天萬拷幡千幡姫。
一書に曰く。高皇産霊尊乃児萬幡姫児玉依姫命。これ神
天忍骨命乃妃となりて。皇天之杵火々置瀬尊をうみま
つる。
一書ニ曰く。勝速日命の児。天大耳尊。これ神。丹舄姫をめ
らして。児火瓊々杵尊を生まナ。

一書にハいとく。高皇産霊尊ハ。拷幡千幡姫。こと
火瓊々杵尊をうみまつる。
一書ニ曰く。天杵瀬命。吾田津姫をめして児。火明命と
ひまつる。次ニ火夜織命。次に彦火々出見尊。
一書にいとく。正哉吾勝々速日天忍穂耳尊。高皇産霊尊
むすめ。天萬拷幡千幡姫をめして。妃となして児と
ウ。天照国照彦火明命。これ尾張連らがはつ祖なり
ヒ。次ニ天饒石國饒石天津彦火瓊々杵尊。これ神大山祇
神のむすめ。木花開耶姫命をめして妃となして。児を
うみ。火酢芹命とまをす。次に彦火々出見尊。

兄火闌降命。れ乃つかう海の幸もとめ。弟彦火々出見尊。おのれう山れ幸もとめ。こゝに兄弟二人あり。こゝを以てのゝ曰く。試に幸かへせゝ。いて。つれよ相易ふ。各その利を得ず。兄悔て。もゝち弟みうその弓箭を叫へ。て。おのゝ鉤とふ。弟ここゝ時にそゝに兄乃鉤とうな。ふ。訪ひ覓ふ。ふ。故別に新鉤とたくて。兄よあり。兄受肯ぜて。そ乃もその鉤とゝは。弟みゝ憂てを。ハちそれ横刀をゝ。新鉤を鍛作して。一箕ふ。をてゝ。へゝふ。兄いう然てのゝ乃ハく。我故の鉤よあゝずハ。多ゝいへこを取らゝといひて。もゝくもゝ責ゝれ。故彦火々

出見尊。憂苦もひゝやいを深し。行つ海畔に吟ふ。れに塩土老翁にあふ。老翁問てをさく。何乃ゆゑぞ。にもゝくて愁へたまるや。對うれよ事れ本末をゝくも。老翁乃もとゝく。もゝなうれへまを。吾はさに汝みうを乃たゝに計らむとこひて。もゝふゝ無目籠をたくて。彦火火出見尊を籠乃なうに内をこゝを海にしたまる。をもゝちれのたかうに。可怜小汀あり。ゝに籠をを。遊行を。たゝ海神之宮につるとふ。それ宮雉堞ゝの。ほゝ。臺屋てをかゝ乃けを。門れ前に一乃井あり。井のほを。にひゝ乃湯津杜樹ゝり。枝葉もひゝき。れに彦火

火出見尊。その樹の本につきてうぶひたるをみるに。
久しくして一美人ありて。閨をはらひていでつひに玉
鋺をもて來て泉さに水をくむ。目擧て見たまふつ
ほにもふかうち驚て還て入て。その父母にまをしていはく。ひ
とりの希客者門の前の樹下にまします。海神これに八重
席薦を敷まうけ。以て延て内れたまふる。坐定まりぬる。
うるはしき來ませる意を問ふ。これに彦火々出見尊。以て
情之委曲をこたへまふ。海神をかうち大小之魚ども。をとに
どへて逼らふ。答まをさく。識らず。たゞ一赤女こゝにありて口
の疾あるまゐ來ぞ。もひてこれをもてこれ口を探れ

ばもろこしてそれ失たる鉤を得。をそれにして彦火々出見尊。
ゆうて海神の女豊玉姫をもつてをして海宮にとゞまりぬ。
まへにこと。已て三歳にありぬ。彼處にまして安樂とへど。
郷をおもふ情まします。故をそれにまた太息まして。豊玉姫こゝ
その父に謂て曰く。天孫悽然てもどくなるのみ。けだし
土を懐ひうふ憂あるべし。海神をかうち彦火々出見尊を
延て。從容て語りて曰さく。天孫をして郷にかへらしめ
さば。吾まさに送て奉はべし。をかうち得る所の鉤を授け
たてまつる。因て誨へまをさく曰さく。これ鉤をもて。汝み
こをそれ兄に與へるの時に。をかはち陰にこれ鉤を呼て。

貧鉤とのさまひて。然して後に與へ給へ。もし潮満瓊及び潮涸瓊を授て。誨まいらく曰さく。潮満瓊をつけバもろもろ潮ひて滿ぬ。此をもて汝ぞこの兄を沒溺せ。もし兄悔て祈バ。還て潮涸瓊をつけバ。もろもろ潮れのつうら涸む。こをもて救ふ。如此せめ惱しのまふ。則ち汝の兄れのづから伏ひ服ふ。まちに歸て去ぬ。豊玉姫天孫に謂てまをさく。妾已にもうす。當に産む時久しからず。妾也必風濤を冒て海濱に出到らむ。請ふ。我ぞ為ふ産室を作て相まちたまへ。彦火々出見尊。をでまして宮にかへりたまひて。一ふ海神の教に遵ふ。

ごとに兄火闌降命。既に危困まりくるしまむ。自ら伏罪て。まをさく。今より以後吾まさに汝ぞの俳優の民たらむ。活たまへ。こに其所乞のまふくつひに救ふ。それ火闌降命ハ。もろもろ吾田君小橋等ぞ本祖なり。のち に豊玉姫ぞ。前に期ぞくそれ女弟玉依姫を将ゐて。直に風波をおこして。海邊につく。産時にいたりて請て曰さく。妾子ぞ。ときに。ねがくハ勿ぞ。天孫猶忍ぶを能ずして。竊に往て覘ふ。豊玉姫方に産時龍にありぬ。ぞ慙て曰く。我を辱しぞ。もろもろ海陸相かよ せハ。もろもろ海陸相かよ。隔絶ぞ。

今をてに辱りをもり。将に何をもく親昵き情を結ぶ。をれ
ら草をもく。児をたゝみて。海邊に棄て海乃途を閉てた
だに去ぬ。故因て以て児を名けまたまて。彦波瀲武鸕鷀草
葺不合尊こまをす。久しくゆゝくして彦火火出見尊崩ま
ぬ。日向乃高屋山上陵に葬りまつる。

一書に曰く。兄火酢芹命は。ら海乃幸を得弟彦火々出
見尊は。山乃幸を得られ。兄弟たがひにそ乃幸を易
とれをほを。故兄弟それみらを乃幸弓をもちて山にいを。
獸を覔ぐつひに獸乃乾迹だにふをらず。弟兄乃幸鉤を持
らひて海にへて魚を釣ほ。らをを獲とらほ。つひに

それ鉤を失りぬ。こ乃ゝられに兄。弟れ弓矢を還して。已ゝ
鉤と責る。弟みらを患いて。帶をれ横刀をもく鉤をつく
りて。箕に盛りて兄にあたへる。兄受ずていをく。
猶ほう幸鉤をほしらをふ彦火々出見尊求り所と
まをたゝ憂吟まれ。ちかゝら行つゝ海邊にいたりて。
たゞもみ嗟歎まれらをいをらの長老たりて。忽然に
つゝほ。らゝゝ鹽土老翁となのるをれゝら問て曰さ
く。君はゝを誰ど。何れゆゑかあゝに患まれや。彦火々出
見尊。具にそ乃ゝられらを言ふ。老翁をゝゝら嚢の中
乃玄櫛をとりて。大目麁籠をたゝり。彦火々出見尊を籠

の中に内て。海に投れたてまつる。

一云く。無目堅間を浮木に爲りて。細縄をもて火々出見尊を繋つけまゐらせて。沉めたてまつれる。所謂堅間ハ今の竹の籠なり。ここに海の底におのつからに可怜小汀ありき。それより汀のまにまに進をたちまちに海神豊玉彦の宮にいたりたまひぬ。その宮城闕崇華樓臺壯麗門のまへに井ありて井のうへに杜樹あり。その樹下につき立たまふ。やや久しくして一美人あり。容貌世に絶たり。侍者群ありて。内よりして出づ。まさに玉壺を以て玉水をくむ。仰て火々出見尊をみつ。まなこもて。かへりてその父神にまうして曰く。門の前の井のほとりハられ樹下に。ひとりの貴客なり。かたちたぐひ人ならず。もし天よりくだらば當に天の垢あるべし。地よりのぼらばまさに地の垢あるべし。實にこれ妙美虚津彦といふものか

一云く。豊玉姫の侍者玉瓶をもて水を汲てつひに滿ることあたはず。俯して井の中をみれば。さかさまに倒に人の笑顔映れり。よりて以て仰ぎみれば。ひとりの麗神まして杜樹に倚たてり。故還入てその王に白す。ここに豊玉彦人を遣して問てまうさく。客ハこれ誰ぞ。何の

以にゐまつに至りぬ。火々出見尊對てのたまはく。吾
はこれ天神の孫なり。もふはち遂に未だ聞る意と言ふ。
こゝに海神。もろ〳〵拜み延て入れまつり。慇懃につかう
まつる。ときに女豐玉姫と以てあまつ世奉る。故海宮にも
ゝとせ經へぬるに。もてに三載に經ぬ。これ後火々出
見尊。もゝとく歎息たまふこと。豐玉姫問てまをさく。天
孫豈故郷にかへらぬをれにをう。對て曰はく。然り。豐玉
姫をもゝて父神に白して曰はく。ちゝにまつる貴客上
つ國に還らむとおもふ。海神ゝに海の魚ゝを總
集へて。その鉤を覓ぬ問ふ。一つの魚あり。對てまをさく

赤女久しく口の疾あり。或ハいはく。赤鯛疑をゝ。ゝうづ
呑ぬ。故まれゝ赤女とをりて。その口をゝれハ鉤猶
口にあり。もゝとゝれを得つ則もく彦火々出見尊に
奉る。ゝりて教まをりて曰さく。鉤をもて。汝ゝの兄
に與へたまふ。詛て曰はく貧窮乃本飢饉の始困
苦の根。ゝりて而して後にあゝ。又汝みゝを
乃兄海を渉ゝとに。吾かなゝ迅風洪濤をたてゝ。
をれをして沒溺し辛苦。ゝに火々出見尊を大鰐に
乘せまつりて。以て本郷ふたゝまつる。是ゝりて且
別ゝに豐玉姫。從容に語てまをさく。妾をでに身ゝり。

當に風濤ふかうして日とともて海辺に出いでむ。請ふ。我が為に産屋を造れ。もてまちたまへ。この後に豊玉姫。ことして其言の如く来で到て彦火々出見尊よまとて曰さく。妾今夜産むべし。請ふ。勿窺て。彦火々出見尊聽しそなはして。猶揖を以て火を燃てらうを視そなはらく。小豊玉姫八尋の大熊鰐と化為て。匍匐逶蛇つちに辱めらをたまふ以て。恨として。徑に海の郷にうへぬ。その女弟玉依姫とうまそて。児を養さむ。この所以に児の名と。彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊をまをす。海濱の産屋全く鸕鷀の羽を用て草とふて葺ふ而も

甍ふき合ぬうちに児をうみ生ませ因てもて名けたてまつる

一書に曰く門の前に一好井あり井に百枝の杜樹あり故彦火々出尊その樹に跳昇りたちうふらくに海神の女豊玉姫手に玉鋺を持て来てまさに水をくむ正に人影井の中にあるをみてをうち仰て驚て鋺をなげつ鋺既に破碎けぬ。そこて顧て還て入て父母に謂て曰く妾一人井の邊の樹のうへにまうをみたて容貌且美たて殆たて人にすぐれたる父神うまして奇みくをうち八重席と

設てむかへ入て坐定りひめらに因て来ませる意を
問ふ。對へて曰ふ情之委曲をもてをこたに海神もふかく
憐心をおこして。こたぐくに鰭廣鰭狭を召して問ひ曰ふ。
皆曰さく。たゞす但赤女口に疾あり。まゐ来ど。亦いたく
口女口に疾りもふかく急ぶ召至らば。先その口を探
れば失へる針鉤。立どころに得つ。こに海神制て曰く。
れのまこ口女。今より以往呑餌ことを得じ。まゐ天孫の饌
に預けじ。をゆゑ口女魚をもて御者にそなへまつる
なり。其縁なり。彦火々出見尊。歸ぬまゐ。海神白てまゐさく。今は天神の孫。つゝしけふく。吾處

に臨下に。中心の依處。何をか日の忘れ難。をひたすら思へば則潮溢之瓊。思へば則潮涸之瓊をもて。その鉤にそへて奉進てまをさく。皇孫は重のち戸ぢを隔つやいへど。
兄。兄くは時よまゐ相憶ほして。勿棄置たまひそ。ゆて
教まをして曰はく。おれ鉤を以て汝みうそ。兄に與へ
のまをらば。則貧鉤滅鉤落薄鉤とのゆひをもて。以
て後手ふ投棄ゆゑ。たゞへ向ひてふ授けまひそ。もし
兄怨怒をおこして。賊害之心あらば。をれもち潮溢瓊を
出して。もて漂溺しまをよ。もしをでに危苦ふいたまて。
愍をたまへ。こゝ。をれもち潮涸瓊を出して。もて救

ひとり。如此逼なる所ゝさば。れのづかゝに臣伏なる。ゝれに彦火々出見尊。うれ瓊と鉤とをゝけて本宮にかへるいで給。一に海神乃教のまに〳〵。先それ鉤をもゝ兄に與へたまふ。兄怒りて受ず。故弟れみゝ。潮溢瓊をつゞせバ。すれゝら潮大ゝに溢て。兄自没溺。ゝりて請て曰ク。吾まさに汝みゝに事奴僕たゝむ。願ゝくハ活ま。弟乃ゝこと潮涸瓊を出せハ。潮れのつかゝ涸て。兄還り平ぎぬ。もでにして兄。前乃言を改て曰。吾ハ是汝ゝを乃兄ゝ。如何ぞ人の兄ゝ。ゝて弟に事へむや。ゝれに潮溢瓊をつゞしまふ。兄ゝて高山に走登ハ。もゝら潮亦山に没ハ。兄高樹にのゞ。もゝら潮まゝ樹につれ。兄もでに窮て逃去ところなしゝれゝら伏罪て曰さく。吾已に過ゝら。今ゝら往ゝれ。吾子孫れハ十つゞれなり。

當ゝ。汝ゝゝれ俳人たゝ。

一ハ云く。狗人請ハ。ゝ。弟みゝ。還て涸瓊を出したまふ。則潮れ乃つゝ息ぬ。ゝに兄弟ゝ。れ神徳ゝすゝ知て。つひに以てそれ弟ゝに伏事。ゝを以て火酢芹命れ苗裔。諸乃隼人等今にゝれ。でに天皇乃宮墻乃傍をゝ。代吠狗ゝてつゝ。ゝれゝ乃ゝ。世人うせなれ針をゝれハ。れ其

ことれをなり

一書に曰く兄火酢芹命。海の幸を得故海幸彦と名
弟みこと。彦火々出見尊ハ能山の幸を得。山幸彦と號を。
兄。もろ〻風ふれ雨ふれごとにをなそれ利を失
る。弟みこと弓矢。風ふき雨ぬれといへごとの
幸たがこれに兄弟ことに謂て曰く。吾試に
汝と幸換せ。弟みこ許ぬ。ゆて易ふ。ごれに兄弟
こゝを乃弓矢を取て。山に入て獸を獵ほ弟みこを。兄
乃鉤をとゆく。海に入て魚を釣。ごをに利をえず。空手
ゆ〻帰。兄もれろ弟みこを乃弓矢をかへして。己

が鉤をこゆ。ごれよ弟みこを。己に鉤と海の中にうし
なひて。訪ひ獲ほ〻ふ〻なし。故ごをに新鉤數千を作て
ゆ〻ふ。兄怒て受ず。故乃鉤を責ゆ〻ほ云云。この
時に弟みこ。海濱に往て。うなゞもゑゞて愁へ吟ふ。
ゆれよ川雁ありて。羂に嬰てゆ。をゆ〻ち憐とれ
ふ心を起して。解てゆ。ゆちをれ須臾して鹽土老翁來
てもゆ〻ち目ゆ〻堅間の小船を作て。火々出見尊と
のせまれて。海の中に推放つ。をゆ〻ち自然にもつこ
ほ。忽に可怜御路あて。故路のまにく往まれ。れのつう
に海神の宮にゆてたまふ。是のゆれに海神ゆれか

迎延て入る。もろかはち海驢皮八重を鋪設てそれうへに坐まりぬ。兼て饌百机をまうけ。もて主人の禮をつくす。ゆるる從容よ。問てまをさく。天神の孫。何乃以にかたゞけるぞ。臨つれ。

一に云く。これは吾子來りて。かうて曰く。天孫海濱に憂まりぬ。語れとていつぶ虛實をもらず。蓋あれらう。彦火々出見尊。具に事之本末をのべうふ。ゆるして留りをみるよ。海神もるゆる其子豊玉姫を以て妻せまつる。つひに纒綿にうれくしまして已ふ三年に成ぬ。歸りをれを忘ともれよ至ぬよ及びて。海神もれうら。鯛女をめ

てそ乃口を探れい。もるはち鉤を得きゆ。にこれ鉤を彦火々出見尊に進つる。うて教まりて曰さくこの乃もをと汝ゆうて乃兄に與へ玉ゆ。うれよもなゆ大鉤跟蹻鉤貧鉤癡駿鉤とのたまへのれ說ふかもれゆうもて後手にるけふへしもでにして鰐魚集てこひて曰く。天神の孫今かへりまるをこすれのら幾日のうちにいまるゆ。うれよもろくれ鰐魚れのおのそ乃長さ短けれまにく。其日數をうぶ。中に一尋乃鰐ゆうこぶうう言さく。一日れうちに則致しまつれべし。故もれうら一尋乃鰐をして。以て送りまつらしを。

また潮満瓊潮涸瓊乃二種乃寶物を進ようて瓊を用ふれ法を教へまつる。又教まつりてさく曰さく兄高田を作らい。汝ら湾田を作ませ。兄湾田をにくらば。汝みらさい高田を作ようへし。海神まことを盡して助けまたるらし。此の如しにかの彦火々出見尊をでにかへりたまふしても。また海神の教に従てうをて行なふそれ後火酢芹命日々ふ襤褸てうをへて曰く。吾をでに貧しをなるらに笑みうをにまうぐふ。笑うにに潮満瓊を出をば。則兄手をうがて溺れ困しを。還て潮涸瓊を出きれをふるうら休て平ぐぬまた是うら先に。豊玉姫天孫に謂して

まことさく妾をでふ娠めり天孫の胤豈海の中に産まれ
ふ理りをや故産むれよ必君乃みをふまうでを如
我為ふうぶ屋を海邊に作ようく以て相まうへうを所
望なり故彦火々出見尊をでに郷にかへりて即ち鸕鷀
の羽をもて葺て産屋をつくる屋乃甍いまうだ合ぬ
に豊玉姫ぐのう大亀に駅て女弟玉依姫将て海を照
てつれうにに孕月をでに満て産期方に急ぬうしに
うて葺合をれを待ぐてたぐちに入まれをでにし
て従容に天孫に謂してまことさく妾ささかをに産まを
請ふ勿見をしと天孫心にそれ言を怪しうてひそうに

覩ふ。もふらく八尋の大鰐に化ぬ。もつて天孫乃かい
まみ〳〵うをとぬうらく慙恨もつるこゝろ懷くもて
に児生もつく後よ。天孫就て問ての〳〵ハく。児の名如何
に名けりを當にうを。對ていとく。彦波瀲武鸕鷀草葺
不合尊と號くべ〳〵のうひ詫てもふらく海を渉もつく徑
にかへ。ぬ。うに彦火々出見尊。もふらく歌〳〵てのう
ぬハく

たきぢを。かをにくもつに。つうね弘〳〵。いをハつを
うじよのうをぐを。

もつていとく。彦火々出見尊。婦人をとりて。乳母湯母及び。

飯嚼湯坐〳〵たうま。もふ尊く諸部をかうり。以て養しぬ
つるうに〳〵權に他姫婦をとりて。乳をもて皇子を養し
まつれ。うれ世乃かうに乳母を取て。児を養す縁なりこ
の後〳〵豊玉姫。その児乃端正なを聞て。心にいを憐ミ重
私。もつく歸を養さをこれ。ぐを義に於て可うゝび。故女弟
玉依姫を遣して。來〳〵養しまつる。うに豊玉姫。玉依姫
にうをく。報哥たてもつ。ぬをていとく。

あうたゞれ。ひう秋ハあを。ひとはいへ。こゝ美うよ
をひ〳〵。たゞをくあうきを。

もへてこの贈答二首と舉歌こゝ。

一書云く。兄火酢芹命。海の幸利を得。弟の火折尊。山の幸利を云々。弟みらを。愁吟て海濱にまれ。ゐに塩筒老翁かあり。老翁問てまうとく。何のゆゑをかく愁まれや。火折尊對て曰く云々。老翁曰さくまく。勿憂へまを。吾まさに計らむ。計て曰さく。海神の御駿まれ。馬ハ。八尋の鰐なり。ゐれその鰭背をたて。橋の小戸にいり。吾まさに彼とゐをに策らをこりて。まさに火折尊を將おて。ゐに往てゐをむ。この時小鰐魚策てまをさく。吾ハ八日の後。まさに天孫を海宮に致し奉つむ。唯我王乃もゐれなる馬ハ。一尋乃鰐魚なり。ゐれ

まさに一日ゐうに必致したてまつる。故今我ゐ。ゐて彼をして出來さむ。宜かをに乗て海に入ゐ。海に入ゐて。ゐこれに海中におのづう可怜小汀あむ。その汀ゐにく。進まさば。かならず我王之宮にいまを。さむ。宮ゐ門乃井ゐほとりに。まさに湯津杜樹ありへし。うべを乃樹の上に就てまつ乃せど。言をゐて訖てまを。ゐ海に入て去ぬ。故天孫鰐魚乃言るゐとのまに。留居て相待ゐまでに八日。久しくしてまさに一尋の鰐ありてこまを。因て乗て海に入る。ゐぐくに前ゐ鰐乃教かまをぐ。ゐに豊玉姫ゐ侍者ゐ。玉鈗をもて

まさに井の水をくむ人影水底かげをみて酌取こと
を得ず。ゆゑて以て仰て天孫をみつめ奏て乃
王に告て曰く。吾我王獨くに絶て麗とおもひき。今一客
ありて。おのづから遠勝ゆ。海神聞ていとく試にもてなすべき云
てもてなす。三の床を設て入れませしむ。こゝに天孫邊
の床に於ていはその両足を拭ひ中乃床に於ていは。則その
両の手を擦し。内の床か於ていは。もっぱら寛に真床覆の
衾のうへに坐ぬ。海神見まして乃ち天神の孫と云
こと知てまいく崇敬ふ云々。海神赤女口女をもて。
問ふ時に。口女口ち鈎を出して。もてたてまつる。赤

女ハもっぱら赤鯛なり。口女ハもっぱら鯔魚なり。ゆゑ
に海神鈎を彦火々出見尊に授まつりて。ゆゑく教まつ
ゆゑく曰さく。兄乃鈎を還すべきに。天孫則まさに言ふ
へし。汝ぞ生子の八十連属のうちに。貧鈎狹狹貧鈎と言
訖て。三下唾して與へ奉へ。まさに兄海に入て鈎せ
よ。天孫宜海濱にまして。以て風招を作べ。風招ハもっぱ
ら嘯なり。如此せハもっぱら吾瀛風邊風を起して。奔
波ともて溺惱さ。火折尊ゆゑく出ぬして。具に神乃教
にまさぬ。もっぱら兄鈎をもて日にいたりて。穿みこと
海にまくして。嘯さゆゑに。迅風ふいうに起る。

兄もろ溺れぬやむ。生るかい由なし。もかいち遥に
弟ろに請て曰さく。汝みらと久しく海原にまして。
必らず術あらむ。願くハ以て救ひ給へ。若し我を活うハ
ど。吾が生の児ハ八十連属。汝ことれ垣ともを離れ
ど。まさに俳優ハ民たらむ。ことに弟ことに嘯らとまぐ
に停て。風もまく吹らまぬ。故ことのみ弟れ徳を知
てまぐひるまに。弟ことに慍色してあれ言ぞ。ら
に兄憤鼻して赭をもて掌に塗て面にぬるとそハ弟れ
みらと告して曰さく。我身を汚すを此ハごとし。永
に汝れ俳優者たらむ。もかもろ足を擧てふみて。その溺

苦の状を學ふ。ことめ潮足につくらるハ。もかもろ足占
にかく膝に至るらるかハ則足をかく。股か至る時にハ
もかもろ走て廻る。腰か至るとれ則腰をもらか。腋に至
かとれか則手を胸にむく。頸につくかとるかハ則手を
擧てたびろかを。それもろ今に到るまで。かつて廢絶か
しらるとそれ。豊玉姫まわ來てまさに産とまれとれ。
皇孫よ請して曰さく云々。皇孫もろがまれ。豊玉姫大に
恨て曰さく。吾が言を用ひずして我に辱をせつ。故今よ
て以往。妾が奴婢君ハ處につらハ。復勿還しまして。君
ハ奴婢妾が處につらハ。亦還ことつひに真床覆の

衾むすび草をもてそ乃児を裹てこれを波激に置さ則
海に入ゝて去ぬ。これ海陸相通はざれこれもこなり。
一云。児を波激に置らをは非し。豊玉姫らだかり抱ゝて
去ぬ。久しくして曰く。天孫は亂をこの海の中におき
まつる。宜しかりずこつひて。もかりら玉依姫をして。持
うしをて送ゝ出しゆつれ。初め豊玉姫別去るらをは。恨
言既切なり。故に火折尊それ復會可かりざれらをと知
しめして。もかりら贈る歌ひり。已に上ゝるゆ
彦波激武鸕鷀草葺不合尊。それ姨玉依姫を以て。妃となし
て。彦五瀬命を生まもゝを。次ゝ稲飯命。次に三毛入野命。次ゝ

神日本磐余彦尊。もをべて四らの男を生を。久しくまし
ゝして。彦波激武鸕鷀草葺不合尊。西の州の宮に崩まし ぬ。
日向乃吾平乃山乃上の陵に葬りまつる。
一書ゝいをく。先彦五瀬命を生れまし。次ゝ稲飯命。つぎ
に三毛入野命。次ゝ狭野命。もゝ神日本磐余彦尊とまし
を。狭野をまををは。こゝ後年少まし西をらの乃號なり。後
に天乃下を撥ひ平げて。八洲をまをし光れまゝ號を加
へ。神日本磐余彦尊こまををす。
一書曰。まゝ五瀬命を生む。次ゝ三毛野命。ほらに稲飯命。
次に磐余彦尊。ゆゝ神日本磐余彦火火出見尊ゝ號を。

一書にいはく。先彦五瀬命。つぎに稲飯命。次に神日本磐余彦火々出見尊。次ハ稚三毛野命。

一書に曰く。まづ彦五瀬命。たぐに磐余彦火々出見尊。次に彦稲飯命。つぎに三毛入野命。

假名日本紀巻第二 終

假名日本紀

卷三

東京圖書館
和書門 國史類 二三九一函 一五架 九四號 一三冊

水ノ三

共三冊

假名日本紀巻第三

神日本磐余彦天皇　神武天皇

明治九年圖書寮文庫

神日本磐余彦天皇諱ハ。彦火々出見。彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊ノ第四子なり。母を玉依姫とぃふ。海童ノ小女なり。天皇生をなるゝにして。明達意確如まし。年十五ふして立て太子となる。長ずして。日向國吾田邑ノ吾平津媛と娶りて妃とす。手研耳命を生む。年四十五歳にして。諸兄おゝよび。子等に謂て曰ハく。むかし我ゞ天神。高皇産靈尊。大日孁尊。この豊葦原瑞穂国をのたまひ擧て。つゞ天津祖彦火瓊々杵尊にさづけ給へ。に火

瓊々杵尊天開をたしゝ闢さ雲路をおしわけ。こうたるひ
むひ以て戻止まれこれらに運鴻荒にうひ時草昧に鍾
れり。故蒙くしてもて正しをを養ひて。たれ西偏を治らす。
皇祖皇考神の聖ふして慶を積み暉をかゝ。多に年を歴
たり。天祖のうけゝぐりまゝてり。以逮今に一百七十九
萬二千四百七十餘歳遠く邈る地猶いまゞ王澤ふれ
ほゝびつひよ邑に君あり。村に長あり。おのくゝゞ疆
とをかちてもて相凌ぎ。躁ゝ抑まゝ塩土老翁に聞
に曰けゝく。東ふ美地うり。青山四方にうぐまり。その中に
まゝ天磐船にのりくゝびて降るもれり。余はまふに。彼

地ハうなゝずまさに。以て天業を恢弘て。天下に光宅に足
ぬべしけだし六合の中心。その飛くゝれどもかハ。
たまふにこ往。饒速日をつふ。何ぞ就て都つくゝざるむ
や。諸皇子ゝゝて曰さく。理實に灼然なり。我らもまゝ恒
にもて念とつ。宜をみ方うふ行ひ。この年。大歳甲寅
それ年冬十月丁巳朔辛酉天皇親諸皇子と舟帥をひうわ
て東を征ふ。速吸な門に至りたまふ。ゝたに一漁人あり。
艇にのりて至る。天皇招てりて問てのゝハく。汝ハ誰
そ。對て曰さく。臣ハこれ國神なり。名を珍彦とまをす。曲浦
に鉤魚を。天神乃子来まゝ次と聞ゝくゝにまふゝ迎

たくまいはまく問てのたまはく。我たゐに導びくべつら
むや。對てまをさく導つかまつらん。天皇勅して漁人小椎
檝乃末をさつたして執へしむて皇舟に牽納もて海導
らんをれらうをに名を賜ひて椎根津彦とたまふこ
れをふるう倭直部らの始祖なり。行て筑紫國の菟狭に
なりますらんよ菟狭の國造祖とべと号を菟狭津彦菟狭
津媛とまをすをふいち菟狭乃川上に一柱騰宮をたらり
て饗たてまつるこかうんよ勅して菟狭津媛をもて侍臣
天種子命に賜妻之天種子命は。これ中臣氏のこかつれや
なり。十有一月丙戌朔甲午天皇筑紫国の崗水門かつら

たまふ十有二月丙辰朔壬午安藝國よつるとまりて埃宮
にまをす。
乙卯年春三月甲寅朔己未うらとて吉備國に入まして行
宮を起ともてまをしをを高島宮をまをす。三年ふれ
間に舟檝をそろへ兵食と蓄へて。まをにもて一舉して天
下を平ぎとれをを。
戊午年春二月丁酉朔丁未皇師つひに東にゆく。舳艫ならび
接とまをさに難波乃碕につうまれ。ときに奔潮らとて太
急にあひぬうとてもて名ぶ方て浪速國とつふまを浪華
ををつふ。今難波とつふは訛れなり。三月丁卯朔丙子川

らう遡流て徑に河内國の草香邑の青雲の白肩の津に至
りまして。夏四月丙申朔甲辰皇師兵を勒て歩らう龍田にた
どむく。その路せまく嶮しくして人並行らずとえぶ。
らちかへりてくだりに東のうつ。膳駒山をこえて中洲に入
らむとしたまひ。ひとに長體彦うしと聞ていとくそれ天神
の子等の來ましし所以かるぞまさに我國を奪うむとす
すごいひてもれらち盡くかに屬る兵をたのみてこれを孔
舍衛坂みうへぐ聚て與に相戦ふ。流矢ありて皇五瀬命の肱
脛にあたる。皇師進み戦ふことをうるず。天皇憂ひのふ。
もふらち神策をみうるのうちに運らく曰ひく。今我は
これ日神の子孫にして。日にむかひて虜を征はられ天の
道にうかもう退還りて弱ひを示して。神祇を禮祭て背に
日神の威を負たてまつりて。影のまに壓ひ蹈むは若
し。如此はもふらち曾て刃に血ぬ虜必自に敗ぬ。衆曰さ
く。然りとて。軍中に令て曰ひく。止まらく停ぬ勿復進みそ。
をなうち軍を引て還りうつ。虜まさに敢て逼らず。却て草香
の津に至りて。盾を植て為に雄詰る。因て改めて其津を名
づけて盾津という。今蓼津という訛なり。孔舍衛
の戦に。人ありて大樹に隱れて。難に免るる事を得たり。仍
てその樹をうるて曰く。恩母の如し。時の人。ありてその地

を母木の邑といふ。今飫悶廻奇といふハ訛なり。五月丙寅朔癸酉軍人茅渟山城水門に次る。（山井水門）もとの名ハ五瀬命の矢瘡痛みたまふ甚しくなりぬ。乃たうみらを劔乃たうみらを取りて雄詰して曰ハく。慨哉大丈夫ふして虜の手をおひて。報ずして死なんこのうふ。時の人因て其處を号けて雄水門といふ。進て紀伊國の竈山ふいたりて卒す。而五瀬命軍に薨ぬ。なりて竈山に葬り奉る。六月乙未朔丁巳。軍名草邑にいたる。もとの名草戸畔者誅をつひよ狭野を越て。熊野神邑にいたる。もとの天磐盾よのぼりて。なりて軍を引て。なりやくにを海中ふして卒に暴風よりひぬ。

皇舟漂蕩ふとれに。稲飯命もまたかち歎て曰く。嗟乎わが祖ハもとの天神。母ハ則海神。いかにぞ我を陸にたしふり海にたしふるやと。言ひ訖てもふりて劔を拔て海に入て。鋤持神となる。三毛入野命もまた恨て曰く。我母おとび姨ハ。並にこれ海神なり。いかにぞ波瀾を起て以灌溺やと。いひて。則浪秀をふみて。常世乃国ふいてまりぬ。天皇獨皇子手研耳尊軍をひきわく進て。熊野乃荒坂津（又の名ハ丹敷浦）ふいたりまりて。因て丹敷戸畔ところをつ。これに神毒氣を吐て。人物くくふ瘁ぬ。これにより皇軍もまた振ふこうるこそ。これふ彼處に人ありて。号を熊野乃高倉下とい。

忽に夜夢らく。天照太神。武甕雷神に勅して曰はく。葦原中國。なほ擾騷喧擾す。宜汝往て征て。武甕雷神對て曰しく。予行ずとも雖も。予が平國之劒を下さば。ちはやぶる國まさに自ら平なむ。天照大神曰く。諾なり。ならに武甕雷神。ちなみに高倉下に謂ていはく。予の劒を名づけて。韴靈と云ふ。今まさに汝が庫の裏にたてまつる。宜しく取て天孫に獻れ。高倉下唯々として。寤ぬ。明旦夢の中の教のごとして。庫を開てこれば。果して落る劒あり。倒に庫の底板に立て。ちなみに取てもて進ぶらるに。天皇よく寐ねたまへり。忽然にして寤て曰く。予何ぞかく長眠しつるや。尋て夢に中る。士卒もこゝにまた醒起ぬ。ものいはずして皇師中洲に趣かむとすれども。嶮絶くして復行ずして路なし。乃徨遑て。その跋渉む所を知ず。時に夜夢見のたまはく。天照大神。天皇に訓まつりて曰はく。朕今頭八咫烏を遣て宜しく以て鄉導者とせよ。果して頭八咫烏あり。空より翔降る。天皇曰くこの烏の來ることは。自ら祥夢にかなへり。大哉赫哉。わが皇祖天照大神。もて基業をたてたまはなさむとしたまふこの烏に大伴氏の遠祖。日臣命。大來目の元戎を督將として。師を率て山を踰て行を啓さしめ。ちはやぶる烏の所向行まにまに。仰ぎて追ふ。つひに菟田の下縣に

たるをうてそれ至りまつる所を号けて菟田の穿邑と云。
らに勅ともて日臣命とほえて曰ハく。汝忠くして且勇
えり。加ふ導の功あり。ふ以もちて汝が名を改て道臣
ごと。秋八月甲午朔乙未天皇兄猾及ひ弟猾を徴しむ。これ
二人ハ菟田縣の魁帥なり。ごとに兄猾まゐ来ぞ。弟猾もま
ら請来をりて軍門を拜して告て曰さく。臣が兄兄猾
逆なるわざをもる状ハ。天孫到りまさずとすこ聞りて。
をふハち兵を起して襲ひ奉ずとす。皇師の威を望見るに。
敢敵ふもぢてこゝろを懼て。もふらち潜にそれ兵を伏して。
權に新宮を作りて殿内に機を施て饗奉らむとまをして。

もて作難とほりを願くハこれ詐を知りてゝ。ふ備へ
ふ。天皇をなりら道臣命を遣してその逆ふれ形を察せ
ふ。時に道臣命審ふ。賊害之心ありこゝを知て。大ふ怒て
詰責て曰く。虜爾ぢ造れる屋ふハ。爾自居ふ。りて
劔のたうを取出ぢり。彎弓ぬりあひて。逼て催入しむ。兄猾
罪を天に獲たれハ。解ふる所なし。乃自機をふみて壓ハれ
死ぬ。ぢれふそれ屍を陳して。られを斬る流る血踝没る
故その地を名けをて菟田血原といふ。もてにして弟猾大
に牛酒を設けもて皇師を勞饗を。天皇その酒を完をもて
軍卒ごとに班賜ふ。もふらち御謠してのゝ言ハく。

うだのたかきに。ちさのかなえ。ぬかのゆ。ゆきはたや
ゆ受。ゆもくさ。くさぢ。くさや。埋。おなみ。ぬれこは。伏。多
ちをばの義。迦。なをくを。おれしひ。為。伏。宇。伏。京。楽。ぬ。なこ
はさば。伊。ちさかき。こ。乃。ほ。ほきくど。これ。多。ひ。為。
ゆれを。来目哥。う。今。樂府。にこれ。哥。と。奏。ふ。れ。に。は。猶
手量。乃。大小。ほ。ふ。び。音。聲。乃。巨。細。あり。是。ふ。へ。乃。遺。る。式
この後に。天皇吉野乃地をみそなはされてさ。為。せ。たまひして。ちか
ちち菟田。穿邑。ちづ。ち。輕兵を率ゐて。巡幸まして。吉野
につちの。こ。れ。に。人。あ。を。て。井。乃。中。ち。出。ち。光。を。て
尾。ち。天皇問て。の。ち。ハく。汝。ハ何人ぞ。對て。まを。さく。臣

ハこれ國神なり。名を井光と。つ。こ。を。れ。ち。ち吉野乃首
部が始祖なり。更少しく進ち。れ。ふ。ち。尾。ち。を。而して
磐石を披て出る者ち。天皇問て曰ハく汝ハ。何人ぞ對て
曰さく。臣ハ是磐排別ぐ子なり。こ。れ。を。な。ち。ち。吉野乃國樔
部の始祖なり。水小縁て西に行にむ。ち。び。て。ち。梁を作て。
魚を取る者ち。天皇問て曰ハく汝ハ何人ぞ對て曰さく臣
ハ。是苞苴擔ぐ子なり。此則阿太養鸕部ぐ。ち。ぬ。め。れ祖なり。
九月甲子朔戊辰。天皇菟田乃高倉山に巓にのぼ。を。して
域の中を。瞻望。こ。た。ま。ふ。ち。に。に國見丘上に。ま。ふ。ち。ハ十
梟師あり。ゆ。ち。女坂に女軍をおき。男坂に男軍をおき。墨坂

に燒炭をたをれ女坂男坂墨坂乃号ハ。こゝ小ゆをてれこれ也。まゝ兄磯城の軍こゝりて。磐余邑に布満そり。賊虜どもの處ところ。皆これ要害之地なり。故道路絶ふ。こゝろ通はるさこころなゝ。天皇悪みゝふ。是夜に。ぢうゝうけひて寢まゝせ也。夢に玉ハく。天神こゝりて訓まゝ也て曰ハくゝべ。天香山乃社の中の土を取て以て。天平瓮八十枚をたくを。并小嚴瓮とつくりて。天神地祇を敬ひ祭ハべし。まゝ嚴乃呪詛をせよ。如此せバ。則虜たのつゝに平伏まゝゝびゝゝ。也。天皇乃ゝしみて。夢の訓ぐをうけたゝハ也たゝひて。こゝりて以てたこゝひゝふ。こゝゝ小弟猾まゝ奏して曰さく。

倭國乃磯城ゝ邑小。磯城乃八十梟師ハ也。まゝ高尾張乃邑に赤銅の八十梟師ハ。こゝ乃類ミゝ。天皇ぐみせ。ま戰ハ也ぐ欲也。臣竊に天皇乃ゝたゝに憂へたゝまつハ。今まゝに天香山の埴を取て。もて天平瓮とたくりて。而して天社国社之神と祭たゝふへゝ。然ゝてのち虜を擊たまゝぐ。まゝハち除ひ安きぐとゝふ。天皇もてゝ夢ゝ辭をもてよゝ兆ゝくゝゝ。弟猾乃言ゝくと聞ゝゝにゝたゝびてまゝひまゝ懷に喜びゝふ。まゝゝ推根津彦をゝて。幣也る衣服及蓑笠とゝさせゝ。老人乃貌にたゝゝ。まゝ弟猾をゝて。箕とさせて老婆乃ぢをかゝにゝなゝて。ゝうゝて。勅ゝてのたゝハ

くらゐ汝たち二人。天香山に到て。ひそかにその巓の土とらずく來旋れ。基業の成む否ハ。まさに汝うらとをもて占ごせ。努力慎しめ。是らの人ハ兵大路にいぶみて。以て往還ゞ。時に椎根津彦。もゝかいち祈ひていハく。我皇當にくこれ國を定めうべきゝバ。行ゞ路にのゞうら通れし。もし能くゝハ賊うなゝを防ゞ。つひ訖てたゞちに去らんと。群虜二人を見て。大く咲て曰く。うれ醜くや。老父老嫗。もゝかいち相ともに道を闢てゆゝ。二人を乃山にいゝれうを得て。土をとをて来歸ゝ。天皇甚に悦びたまひて。もゝかいち埴をもて。八十平瓮天手抉八十枚嚴瓮を造作りたまふ。ちうして丹生の川上にのゞりて。用て天神地祇を祭まひたまふ。もゝかいちかゝ菟田川乃朝原にたゝハ水沫の如くにして。呪著所ゝり。天皇よりてまゝ祈之て曰く。吾今まさに八十平瓮をもて水なゝにして。飴を造らむ。飴成らハもれもゝ。吾うゝず。鋒刃之威を假をて。坐なゞゝ天下を平む。もゝかいち飴を造ひたまふ。飴もゝかいち自成ぬ。まゝ祈て曰く。吾今ゆさに。嚴瓮をもく丹生之川に沉めゝ。もし魚大小うゝぐく。醉て流れゝゝ。譬ハ猶枝の葉れ浮流ゞうくあゝバ。吾ゝなゝずうくこの国を定めて。もしそを爾らゞハ。終て成れる所かれゝ

とのうひてもれうち瓮を川に沉めたまふ。それ口下ふむ
ひて流まうまうくありて。魚らふ浮び出て。水乃まにく
喰喎られに椎根津彦見てこうを奏す。天皇大きにうろお
びうひてもれいち丹生川上の五百箇真坂樹を抜取ふ
して。以て諸神を祭ひうふ。うう始めて嚴瓮乃置もの
はうら。られに道臣命ふ勅をうく。今高皇産霊尊ともて朕親
顯齋をかさ。汝を用て齋の主となして。授ふ嚴姫の号
を以てせむ。而してその置ふ埴瓮を名けて嚴瓮とす。又
火れ名をば。嚴香来雷とう。水乃名をば。嚴罔象女となし。
粮乃名をば。嚴稲魂女とふ。薪乃名ふは。嚴山雷とふ。草

乃名をば。嚴野椎とす。冬十月癸巳朔。天皇その嚴瓮の粮
を掌うひて。兵を勒へて出う。先八十梟師と國見の岳に
うちて。破て之を斬つこ乃役に。天皇志うるうず。克なをと
つこをを存ち玉へををいち御謠して曰く。
かむ可を乃。伊勢れ方みれ。たほへにやいをひをらふ
ふ。去た陀美れ。去たて美乃。あごよ。あごよ去たうこ乃。い
をひもやをうをうてしかを。うちてやまむ。
謠乃意ハ大なれ石をもて。それ国見の岳にたうるう。
をでにして餘黨なふ繁くしてその情測かうをを邪いち。
ひそうに道臣命に勅をうく。汝ふうしく大来目部を師て。

大室を忍坂邑に作て。さかりに宴饗を設けて。虜を誘て取とのふ。道臣命こゝに密乃おや首を奉て寿を忍坂にわを寄。而て我猛卒を選て。虜と雜居てひそうに期て曰く。酒酣乃のち。吾もかゝら起て歌ハ。汝等ワゞ哥乃こゑを聞ハ。一時に虜とこゝを。もでにして居まりて。酒行て。虜我ハ陰謀あるべきゝず。情乃まゝにわしいまに。醉ぬ。ゑれハ道臣命。もかいち起てゑれを歌て曰く。

をさうれ。たわむろなに。ひとけそに。いをそりをひや
さそに。きいをそりをも。うくゝく。ゑ乃まるゞ。かふつ
にい。いしにゝ。伊もち。うちくしやまを。

ゑれに我卒歌をきゝて。ことにそれ頭推劔をぬきて一時に虜をうゝつ。まゝのこられ者ハ。皇軍大に悦びて。天を仰ぎて咲ふ。因て歌して曰く。

いゆハよ。いゆハよ。あゝ咲声ナリしやをいぬたゝも。あこよ。いゆ
たわもあこよ。

今来目部ハ歌ひて。後に大ようゝハ。これを乃縁ゆ。又歌之曰く。

えみしゝ。ひやを。をゝ百ノ人なひと。ひやをハいなやを。たむうゝ
をきず。

ゑれを密吉をうけて歌ゝ。敢て自専なるにあゝず。

られか天皇曰く戰勝て驕ふらをあさハ良將乃行あり。今魁賊をでふ滅て同く悪者匈匈十數羣ゝりいるその情知をうゝを如何ぞ久く一處に居て以てをかるごをもれ事無りしく云てをふいち營を別處ふ徙たまふ十有一月癸亥朔己巳皇師大ゝこぞりて將ゝ磯城彦を攻をを先使者を遣して兄磯城を徵しむ兄磯城命をうけぞゝに頭八咫烏を遣して之を徵を時に烏其營にいるをて鳴て曰く天神の子汝を召を怡弉過怡弉過兄磯城いうをて曰く天壓神至まんと聞て吾ゞ慨憤ゝ有る時にいうにぞ烏乃烏かくあくく私なくやとをいてをふいち弓彎ゆうまひて射ふ烏をふゝち避去ぬ次ふ弟磯城ゞ宅にいるをて鳴て曰く天神乃子汝を召を怡弉過怡弉過時に弟磯城慄然改容て曰く臣天壓神至まんと聞て旦夕畏懼ふ善うなふ烏汝ゝ如此鳴くやと云て。をふゝち葉盤八枚とつくりて食物を盛て饗之因て以て烏乃まに詣到て告して曰。さく吾ゞ兄兄磯城天神乃みこ来まんと聞をて。をふゝち八十梟師と聚り兵甲とをなへて。まさに與戰うををん。早に圖をるへしとまをん。天皇をふいち諸將をつどへて。問之て曰ハく今兄磯城ゝをして逆賊之意あり。召をに之ふまゐ来ぞ。これを為をゝを如何諸將いをく。兄磯城ハ

黠な賊なり。宜まづ弟磯城を遣はして。これを曉喩へし。
并で兄倉下弟倉下と説さしめたまへ。もし遂に歸順ずハ。
然して後兵を擧て臨之べし。まさに晩かるべきもふハち弟磯
城をして利害を開示しむ。而ふに兄磯城等なほ愚かる謀
を守りて肯て承伏せず。椎根津彦計之て曰ハく。今ハうべ
まづ我女軍を遣して忍坂の道より出さバ。虜らこれを見て
うるはしぶ銳兵を盡して赴うむ。もし則勁卒を駈馳て。たぶ
ちふ墨坂を指て。菟田川水をとらして以て。その炭火に灌ぎ。
儵忽之間に其不意に出バ。もふハち破ぶべし。必あり。天
皇その策をよろこぶ。もふハち女軍を出して。もてこせしめ

べし。虜大兵をでに至ほを謂ひて。力を畢して相待。これよ
り先に。皇軍攻て必取り。戰ひて必勝り。而して亦胄之士ど
を疲弊る事無にしむべし。故に聊に御謠を爲て。以て將卒
の心を慰めまど。謠して曰ハく。
たゝなぞいおのやぷ。このぬゆをいゆれまゝ
ひ。ゑ。かへぞ。わ我後ハや早。忘ぬ。去ぷ清を探。うかひがごを。
いぷ今をけふら助。
ゝて男軍をもて墨坂を越て。後ゝうゝみうて破
る。その梟師兄磯城等をころしつ。十有二月癸巳朔丙申皇
師つひに長髓彦をうち。連戰ひて勝ゝをあゝずゝられよ

忽然に天陰て雨氷ふれもふふ金色の靈鵄うりとび
来て皇弓の弭に止まりそのの鵄光曄煜形こ〳〵流雷のご
こ〳〵是小由て長髓彦の軍亟ごもこな迷眩てまゝ力戰ハ
ぞ。長髓ハ是邑の本号なり。因てまゝもて人の名ごを皇軍
の鵄の瑞を得るに及びて。時の人ようて鵄邑ごなつく。今
鳥見ご云々訛もる也。むゝ孔舍衛の戰ハ。五瀬命矢に中
て薨ぎ。天皇ふれを銜もちひて。常小憤ぎ懟ひること
懷ぎ。この役に至て。意に窮誅ぎ。ものたまて。もゝ
ち御謠して曰く。

みはしつ〳〵久米の子らが。かきをごに。あはふにハ。かゝ

垣本 薩

ひを毋ご。そのづもを。そ祢ぬにて。うちてしなはむ。

繁

もゝ謠して曰く。

うちて美はし久米ぢらが。うたをごに。うゑしもぐかみ。

董

くちひゞく。ひれハもを佩ぶぞ。うちてしやまを

ちうてもゝ兵を縱て。忽に攻たまふ。もべてこの御謠ハぎ

な來目歌ごつ。ふれハ的て哥へハもれを取て。名つけゝ

るゝ。ふれに長髓彦もふハち。行人を遣して。天皇にまを

して曰さく。嘗天神の子まゝくて。天磐船にのりて天より

降て止まゝを。名づけて櫛玉饒速日命ごまをふ。ことわゞ

妹三炊屋姫。また乃名ハ長髓姫また乃名ハ鳥見屋姫を娶てつひに児をうム。名を可美真手命こゝろ。故ハ吾饒速日命を以て君として奉まつる。そゝ天神乃子豈両種まさ〻ずや。如何ぞうに天神の子と稱ス。以て人地を奪ふ〻ずや。吾心ハ推ふうに見るに必信ずるむ。天皇曰く。天神乃子多ハあり。汝が君ゝまさ所是實ハ天神の子ずるハ。必表物ありむ。相示せよ。長髓彦即ち饒速日命乃。天羽羽矢一隻ならび歩靫をとりて。以て天皇に示せたてまつる。天皇こゝをかゝてはゝをるゝを察ごのゝうひて。還て所御天羽々矢一雙ならび歩靫を長髓彦に示せたまふ。長髓彦ゝ乃天表をゝて。まさく跡躇まさゝを懐く。もゝうて凶器をすでに構へてゝ乃勢ひ中休にを〻ゝを得ば。而て猶迷へる圖を守ゝて復改る意なゝ。饒速日命もごとゝ。天神慇懃にしゝふハ。たゞ天孫是にゝうゝ王ゝうゝこゝを知まつる。且ゝ乃長髓彦乃稟性愎很て教ふれに。天人之際を以てをゝうゝざれこゝを見て。をふハちゝを殺してゝ乃衆を帥て帰順ふ。天皇もごとゝ饒速日命ハ。ゝれ天ゝ降ゝりこゝふゝを聞しめせり。而ゝて今果ゝて忠効を立ゝふ。をふハち褒て寵ゝふ。ゝれ物部氏乃遠祖ゝり。

己未年春二月壬辰朔辛亥。諸将に命ゝ勇て士卒を練ふ。

これらに層富縣波多丘岬に新城戸畔といふものいふ。また和珥の坂本に居勢祝といふ者いふ。臍見の長柄の丘岬に猪祝と云ものいふ。此三処の土蜘蛛並ふ。その勇力とを恃て。來庭肯はず。天皇。乃偏師を分ち遣て。こゝに誅さしめたまふ。また高尾張邑に土蜘蛛いふ。その人となり身短くして手足は長し。侏儒と相類たり。皇軍葛網を結て。にそひ殺しつ。ならびて改てその邑を号けて葛城と云。夫磐余之地舊の名は。片居また片立といふ。我が皇師の勇をもつて。ならびて大軍ならべ集ひて。その地に満ちぬ。ならびて改めて号けて磐余といふ。或いそく。天皇さらに嚴竜の粮を嘗ひて軍を出して西征たまふ。このときにふ。磯城の八十梟師そこに屯聚居たり。果して。天皇と大きに戦ふ。つひに皇師の為に滅ぼされぬ。故名づけて磐余邑といふ。また皇師立詰し処を。是を猛田と云ふ。城作る所をなづけて城田と云ふ。また賊衆戦死て屍を僵し。臂を枕にせし處を呼て。頰枕田といふ。

天皇前年の秋九月を以て。潜に香山之埴土を取て。以て八十平瓮を作りて。躬自齋戒して。諸神を祭りたまふ。つひに區宇を安定しを得たまふ。故土を取し処を号けて。埴安と云。

三月辛酉朔丁卯。令を下して曰く。我東を征しらし。こに六年にならぬ。皇天の威を頼りて。山徒こゝにたまふ。邊土

いまゝ清まゝれ餘のゝゝいハひなかあまゝ里といへゝも
中洲之地にまゝ風塵なゝまこゝに宜ゝく皇都を恢め廓
れ。大壯をとかとつくはべゝ。而ゝを今。運こゝの屯蒙にあひ。
民心朴素なゝ。巣に接み穴に住む志ゝ。これ常ことかれゝ。
それ大人制を立て。義ゝをゝを時に隨ゞ。いゝ如ゝくを民
に利ゝゝハ。何ゞ聖ゝのとゞに妨ゝゝ。且まゝに山林をひゝ
れゝゝひ。宮室を經營ゝくゝ。ゝみて寶位に臨ゝもて元
元をまれむゞゝ。上ハまかゝゝ。天の神れ国をゝたきゝ。
德にゝゝへ下ハまれゝゝ。皇孫正ゝれを養ひゝ。心を弘
めむ。然ゝて後に。六合を兼て。もて都とひゝれ。八紘を掩ひ

て宇ごせむゝゝ。亦可かゝむゞや。觀バうれ畝傍山の東南橿
原之地ハ。けだゝ國之墺區なゝ。ゝ治れゝこゝの月に。即有司
に命て。帝宅を經始む。庚申年。秋八月癸丑。朔戊辰。天皇まゝ
に正妃を立むとゝ。改めて廣く華冑を求めゝ。時に人ゝう
ゝて奏て曰さく。事代主神三島溝樴耳神の女。玉櫛姫小共
ゝて。所生ゝゝハ児号を。媛蹈鞴五十鈴媛命と曰ゝ。これ国
色之秀ゝれ者なゝ。天皇悅びゝ。九月壬午朔己巳。媛蹈鞴
五十鈴媛命を。納て以て。正妃ごゝ。辛酉年春正月
庚辰朔。天皇橿原宮に。即帝位を是歳を。天皇の元年ゝなす
正妃を尊ひて。皇后ごゝ。皇子神八井耳命。神渟名川

耳尊をうこゝろ。故に古語小稱まとして曰さく。畝傍の橿原に於て底津磐根に宮柱太立高天之原に榑風峻峙て。始馭天下之天皇を号け奉る。神日本磐余彦火々出見天皇と曰を。天皇天基を草創る日に。大伴氏之遠祖道臣命。大来目部を帥ゐて。密策を奉承る。諷哥倒語を以て。妖氣を掃蕩へ。さかしまの語乃用ひたまふ。そ。是れ起れり

二年春二月甲辰朔乙巳。天皇功とそ賞をそめり。道臣命に宅地を賜ひて。築坂邑に居らしむ。こゝに寵たまふ。また大来目をして。畝傍山乃西の川邊の地に居らしめ。今來目邑と号けく。これそれ縁なり。珍彦をもて倭國造と為を。又弟猾に猛田邑を賜ふ。因て猛田縣主と。玉手ふ。是菟田主水部の遠祖なり。弟磯城名ハ。黒速と磯城縣主らし。また劔根と。者を以て葛城國造と為玉ふ。又頭八咫烏を賞の。こゝに入る。そ乃苗裔ハ。ふたり。葛野主殿縣主部ともなり。

四年春二月壬戌朔甲申。詔して曰く。我皇祖の霊天より降ひ。ともなりて。朕が躬を光し助けり。今諸虜をでに平き海内に事なし。以て天神を祭祀て。もて大孝をを申ぶ。をふいち霊時を鳥見山中にたつ。そ乃地を号けて上

小野榛原下小野榛原とつて。もて皇祖の天神を祭る。

三十有一年夏四月乙酉朔皇輿巡幸まして腋上嗛間丘に登ぼりて。國の状を廻望る。曰はく。妍哉国をかつ。内木綿之真迮國こゝへごも。猶蜻蛉の臀呫せるが如くもあるかな。是に由てまづめて。秋津島の名あり。伊弉諾尊。この國を号づけて。曰はく。日本者浦安國細戈千足國磯輪上秀真國。まさきくの大己貴神。こゝを目てのたまはく。玉牆の内国。饒速日命の天磐船にのぼりて。大虚とめくりて。この郷を睨てあまくだりたまふ。至ほに及びて。故因てこれを目て虚空見日本国とつ。

四十有二年。春正月壬子朔甲寅。皇子神渟名川耳尊を立て。皇太子とす。

七十有六年。春三月甲午朔甲辰。天皇橿原宮に崩ましぬ。ときに。年一百二十七歳。明年秋九月。乙卯朔丙寅。畝傍山の東北陵に葬りまつる。

假名日本紀第三　終

御本云

日本書紀歷代之古史也　元正天皇養老年中一品舍人親王太朝臣安麻呂奉　勅撰之吾朝撰書迨　奏覽以是爲權輿者耶君臣共以莫不窮此書矣按　應神天皇以還至　繼體天皇御宇異域典經多以雖來朝不解其義徒經三百有餘歲矣　推古天皇御宇聖德太子察三才之源達三國之起故始以漢字附神代之文字傍於于爰吾邦人浸得識量典經之旨非至聖誰敢成此縡哉蓋神道者爲萬法之根抵儒教者爲枝葉佛

教者為花實彼二教者皆是神道之末葉也雅以
枝葉顯其本原然則異曲同工者歟頃學儒佛者
夥而知神書者鮮矣物有本末事有終始何棄本
取末焉於神國爭疏神書乎萬機之政尚以神事
爲最第一但神代事理既幽微非理不通欽惟
陛下寛惠叡智之餘後世惜其流布之不廣遂命鳩
工於是始壽諸梓矣舊本頗純駁不一求數本考
正之去其駁而録其純用之國而及之天下則以
成熈皈之治以紹神尊之統保瑞穗之地千五百
秋將必有賴於斯焉

慶長己亥姑洗吉辰

正四位下行少納言兼侍從臣清原朝臣國賢敬識

六月日本紀を少納言清原の有定國資卿の假名書
法門寺山田所持の所世にたぐひまれなるにより写く
まゝ一部をうつしとゞめ後世に残り侍るべく予に命ぜ
られ侍りしかれども老年素筆あやまりおほきものゆ
へにまゝかゝ全部三十巻仕千百九十三丁一字もおろそ
かにせずとたゞしてもとめに享保戊の春書うつしをはぬ
ぬ人手ゆゑの為にうるはしくたゞして一字をたゞしかるを
賜ふべし

享保三戊戌の

初春上旬

秦氏末流
香河景号書寫

29
3
9

明治七年十一月十五日官許
同　八年八月發兌

山岸氏藏版

書肆　岐阜縣下
東崖堂發兌

129
2
9

偽名日本紀

六三上

假名日本紀　卷二

東京圖書館
和書門　國史類　二九一函　一五架　九四號　三冊
水三　廿三本
12 3 9